

平成28年度
自然体験活動等長期研修

研修報告書

研究課題

児童と地域住民相互の自己有用感を醸成するための研究
－AFPYの手法を用いた地域交流を通して－

山口市立上郷小学校

教諭 末廣俊夫

(平成28年度自然体験活動等長期研修教員)

目 次

1 研究の意図

- (1) 研究の背景
- (2) 研究テーマ設定の理由
- (3) 研究の仮説

2 研究の内容

(1) 研究の方法

- ア 本研究における自己有用感
- イ AFPY について
- ウ 地域交流に用いた AFPY の手法について
- エ AFPY の手法を用いた地域交流について
- オ 本研究の地域及び地域住民の捉え方
- カ 調査に関して
 - (ア) 調査のねらい
 - (イ) 調査対象
 - (ウ) 調査内容・方法

(2) 研究の実際

- ア 地域交流実践の概要
- イ 地域交流 1 「チャレンジ米作り」
 - (ア) 地域交流 1 の概要
 - (イ) 地域交流 1 の実際
 - (ウ) 地域交流 1 の考察
- ウ 地域交流 2 「上郷ハッスル誠塾」
 - (ア) 地域交流 2 の概要
 - (イ) 地域交流 2 の実際
 - (ウ) 地域交流 2 の考察

(3) 研究の結果と考察

- ア 地域交流 1 及び地域交流 2 の結果と考察
 - (ア) 自己有用感について
 - (イ) 三要素の変容について
 - a 「存在感」について
 - b 「貢献」について
 - c 「承認」について

3 研究のまとめと今後の課題

- (1) 研究のまとめ
- (2) 今後の課題

児童と地域住民相互の自己有用感を醸成するための研究 —AFPY の手法を用いた地域交流を通して—

山口市立上郷小学校 教諭 末廣 俊夫

1 研究の意図

(1) 研究の背景

中央教育審議会答申（平成27年12月）では、地域社会のつながりや支え合いの希薄化等による地域の教育力の低下が指摘されている。そこで、開かれた学校から更に一步踏み出し、地域の人々と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」へと転換を図る取組を推進していく必要があると提言されている。また、学校教育を巡る改革の方向性や地域創生の動向については、学校と地域の連携・協働の重要性も指摘されている。

山口県教育委員会では、平成27年から、コミュニティ・スクールを核とした本県独自の取組である「地域協育ネット」の仕組みを生かして各中学校区で地域のネットワークを形成している。また、学校、家庭、地域が連携・協働することにより、社会総がかりで子どもたちの学びや育ちを見守り支援する「やまぐち型地域連携教育」を推進している。

(2) 研究テーマ設定の理由

原籍校では、「地域とともにある学校」づくりに向けて、コミュニティ・スクールを推進している。その例として、校区内の大学や高等学校との交流、地域ボランティア活動及び地域住民による登下校の見守りなどが挙げられる。しかし、児童の中には、地域住民と積極的に関わることができていない様子や、また、地域住民に見守られていることを実感できていない様子もうかがえる。

図1は、5年生児童72人を対象に実施した、学級、家庭、地域における自己有用感に関する実態調査結果である。調査は、「とてもあてはまる」を4点、「あてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点と換算して実施し、平均値を算出した。図1の結果から、家庭での自己有用感と比較すると、児童の地域における自己有用感は低いことが分かる。

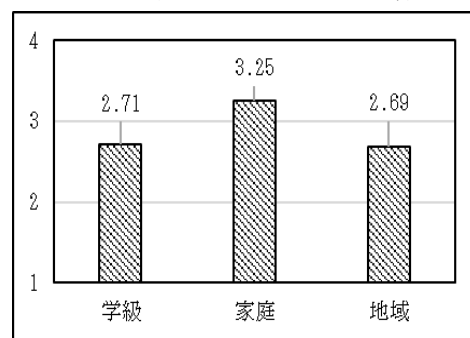


図1 自己有用感の実態調査結果

そこで、本研究では、児童の自己有用感を醸成させるために、AFPYの手法を用いた地域交流を行うことを考えた。児童と地域住民がAFPYを通して関わりをもつことで、「認めてもらえてうれしかった」、「役に立ててよかった」、「必要とされていると感じた」等の思いを抱くことにつながり、自己有用感を醸成させることに有効であると考えた。また、コミュニティ・スクールを支える地域住民にも注目し、児童だけでなく、児童と地域住民相互の自己有用感の醸成をめざすこととした。

(3) 研究の仮説

以上のことから、研究の仮説を「AFPYの手法を用いた地域交流を行うことで、自分の存在を価値あるものとして受け止めるようになり、児童と地域住民相互の自己有用感を醸成する効果がある」とし、学校や地域での実践を通して検証することとした。

2 研究の内容

(1) 研究の方法

ア 本研究における自己有用感

本研究では、自己有用感を「他者や集団との関係の中で、自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚」*¹と捉えた。そして、自己有用感を構成する主要素を、「存在感」「貢献」「承認」の三つとすることにした。「存在感」とは、他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感を表している。「貢献」とは、他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという状況を表している。そして、「承認」とは、他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況を表している。これら三つの要素が互いに関連し合い、自己有用感は醸成していくと考える。

イ AFPY について

AFPYとは、「Adventure Friendship Program in Yamaguchiの略称で、他者とかかわり合う活動を通して、個人の成長を図り、豊かな人間関係を築くための考え方と行動の在り方を学び合う、山口県独自の体験学習法」*²である。AFPYには、「様々な活動を通して、『個人の成長』を促し、『自己肯定感の向上』や『自信の回復』をめざすと同時に、『集団の成長（集団づくり・仲間づくり）』を促し、集団におけるよりよい人間関係づくりをめざす」*³というねらいがある。

これまでの調査研究によると、AFPYは人間関係をよりよくするために有効であることが報告されている。また、県内では、AFPYアドバイザー^{注1}を中心に学校教育や社会教育の中で、児童生徒や教職員を対象にAFPYを活用した人間関係づくりが取り入れられている。

ウ 地域交流に用いたAFPYの手法について

地域交流に、次の四つのAFPYの手法を用いることとした（表1）。

表1 AFPYの手法と主なAFPYの活動

AFPYの手法	主なAFPYの活動
安心感 「互いを認め合い、安心できる雰囲気づくりをする」	・ 知り合うための活動 ・ 緊張をほぐすための活動
コミュニケーション 「コミュニケーションを図るため、グループ活動の場を設定する」	・ 知り合うための活動 ・ 少人数のグループ活動 ・ 課題解決活動
役割意識 「役割意識をもたせ、課題解決活動を実施する」	・ 少人数のグループ活動 ・ 課題解決活動
認め合い 「振り返り活動の中で、互いに認め合う場を設定する」	・ 振り返り活動

エ AFPYの手法を用いた地域交流について

地域交流にAFPYの手法を用いた活動の流れについては、図2のとおりである。

まず、児童と地域住民でAFPYの活動に取り組む。知り合うための活動や緊張をほぐすための活動を通して、互いを認め合い、安心できる雰囲気づくりを行う。次に、少人数のグループ活動を通して、児童と地域住民のコミュニケーションを図る。さらに、一人ひとりが役割を担っていることに気付き、協力し合うことができるように課題解決活動を実施する。

AFPYの活動後に振り返り活動を行う。活動での気付きや学びを整理し、その後の地域活動で他者と関わろうとする意欲を高めていく。

振り返り活動後には、地域住民主体の地域活動を行い、児童と地域住民の交流を促す。

最後に、地域交流全体の振り返り活動を行う。地域交流での学びを日常生活へつなぐことができるようにするため、活動中の言動を価値付ける。地域交流を通して、互いの行動や存在を認め合うことで、児童と地域住民相互の自己有用感を醸成させる効果があると考えられる。

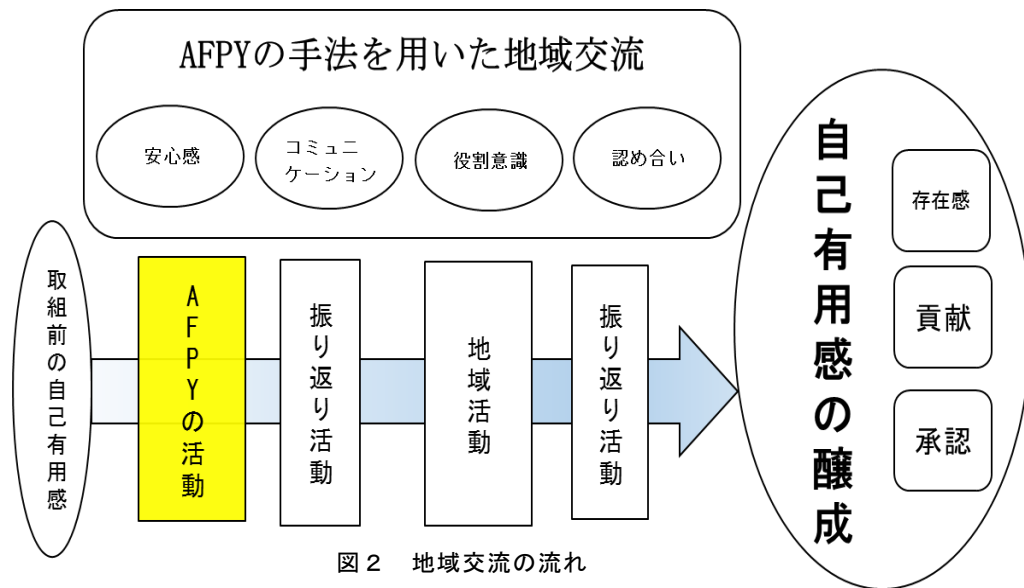


図2 地域交流の流れ

オ 本研究の地域及び地域住民の捉え方

山口市立上郷小学校区には、保育園、小学校、高等学校及び大学などの教育施設がある。この上郷小学校区の教育環境を活用し、幼児、生徒及び学生との地域交流の場を設けることで、児童が様々な異年齢集団との関わりをもつことができると考えた。

本研究では、地域を異校種として校区内の大学、高等学校、幼稚園及び保育園、また、関係団体として地区子ども会、母子生活支援施設、スポーツ少年団及び地域交流センターとした（図3）。

なお、地域住民は、上記団体に属する地域住民と上郷小学校児童に関わる地域住民と捉えることとする。

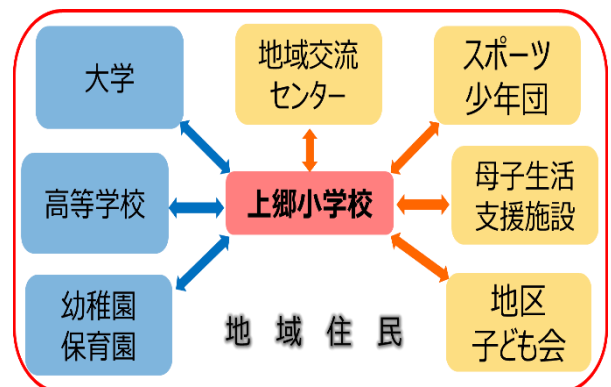


図3 本研究の地域の捉え

カ 調査に関して

原籍校や地域において、AFPYの手法を用いた地域交流を実施した。

(ア) 調査のねらい

原籍校児童と地域住民の自己有用感の変容を調査する。

(イ) 調査対象

原籍校児童と地域住民を対象とした。

(ウ) 調査内容・方法

栃木県総合教育センターが考案した「自己有用感尺度」を参考に10項目を設定した質問紙を用いて、AFPYに取り組む前と地域交流1回目実施後、2回目実施後及び3回目実施後に調査を実施した（表2）。

表2 自己有用感に関するアンケート

ふだん思っていることについてアンケート					
()年()組()番 名前()		4	3	2	1
(1) あなたが、ふだん思っていることを教えてください。 ※「地域」・・・上郷小学校区の地域		とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
No	質問項目				
1	わたしは、地域の役に立っていると思う。	4	3	2	1
2	わたしは、地域の人を信頼している。	4	3	2	1
3	わたしは、地域の人と一緒にいると安心できる。	4	3	2	1
4	わたしは、地域の人に支えられていると思う。	4	3	2	1
5	わたしは、地域の重要な一員だと思う。	4	3	2	1
6	わたしは、地域の人から信頼されていると思う。	4	3	2	1
(2) あなたは、ふだんの生活の中で、次の7から10の経験がどのくらいあると思いますか。		よくある	ときどきある	あまりない	まったくない
No	質問項目				
7	わたしは、地域行事の手伝いをすることがある。	4	3	2	1
8	わたしは、地域行事に参加することがある。	4	3	2	1
9	わたしは、地域の人から「ありがとう」と言われることがある。	4	3	2	1
10	わたしは、地域の人からほめられることがある。	4	3	2	1

なお、自己有用感を構成する主要素の変容を調べるために、要素別の質問内容を設けている。表2に示している1、5、及び6の質問内容が「存在感」に関わるもの、7と8の質問内容が「貢献」に関わるもの、そして、9と10の質問内容が「承認」に関わるものである。

(2) 研究の実際

ア 地域交流実践の概要

児童と地域住民を対象に、学校や地域でAFPYの手法を用いた地域交流を実践した(表3)。なお、同一参加者を対象に3回実施した地域交流1と地域交流2の二つの地域交流の実践を取り上げる。

表3 地域交流1及び地域交流2の実践概要

	対象	活動内容
地域交流1 「チャレンジ米作り」	5年生72人と 地域住民11人 (高校生)	①AFPYの活動と種まき・苗作り ②AFPYの活動と地域の農業発展に 尽した偉人の業績を知る活動 ③AFPYの活動と稲の花の観察
地域交流2 「上郷ハッスル誠塾」	4年生から6年 生まで32人と 地域住民24人 (大学生含む)	①AFPYの活動と学習会 ②AFPYの活動と学習会 ③AFPYの活動と学習会

また、その他の AFPY の手法を用いた地域交流は表 4 に示す。

表 4 その他の地域交流の実践概要

	対象	地域活動の概要
地域交流 3 「なぎの木連携 プロジェクト」	5 年生 28 人と 地域住民 7 人 (大学生)	AFPYの活動と清掃活動 地域住民が上郷小学校の清掃活動に参加し、児童に掃除の仕方を指導する。
地域交流 4 「居住地交流」	4 年生 28 人と 地域住民 1 人	AFPYの活動とお楽しみ交流会 4 年生児童が企画したお楽しみ会で、上郷小学校区に居住する児童（特別支援学校に在籍）と交流をする。
地域交流 5 「夏祭り」	児童 49 人と 地域住民 15 人	AFPYの活動と地区夏祭り 地区の夏祭り会場で、子ども会が主催となり、児童と地域住民の交流を図る。
地域交流 6 「親子 レクリエーション」	児童 27 人と 地域住民 21 人 (保護者含む)	AFPYの活動と親子レクリエーション 母子生活支援施設が親子のふれ合い促進のため、レクリエーションを行う。
地域交流 7 「夏休み 地区子ども会」	児童 13 人と 地域住民 5 人 (保護者含む)	AFPYの活動と鮎掴み 集会所で、地区子ども会が主催となり、鮎掴みを行う。
地域交流 8 「スポーツ少年団 交流会」	児童 14 人と 地域住民 11 人	AFPYの活動と剣道の練習 スポーツ少年団に所属している児童、保護者及び指導者が交流会を行う。
地域交流 9 「新山口 ゆめフェスタ」	児童 45 人、 幼児 22 人と 地域住民 53 人	AFPYの活動と新山口ゆめフェスタ 地域交流センターで、新山口ゆめフェスタ実行委員会が主催となり、「職業体験」、「地域参画イベント」、「ステージイベント」、「飲食コーナー」の四つを開催する。
地域交流 10 「幼保小交流」	1 年生 108 人と 園児 129 人	AFPYの活動とあそびランド 上郷小学校 1 年生児童があそびランドを企画・運営し、校区内の園児と交流を図る。

イ 地域交流 1 「チャレンジ米作り」






(7) 地域交流 1 の概要

毎年、山口市立上郷小学校 5 年生児童は、総合的な学習の時間に、近隣の高等学校と米作りの交流を行っている。この米作りの交流を通して、米作りに関する知識や技能だけではなく、5 年生児童と高校生の関わりを促進するために、米作りの前に AFPY の活動を取り入れることにした。

(イ) 地域交流 1 の実際

地域交流 1 の活動内容と用いた AFPY の手法を表 5 に示す。なお、【 】内に、用いた AFPY の手法、そして「・」に AFPY の活動名を示すこととする。

表5 地域交流1の活動内容

	1回目	2回目	3回目
AFPYの活動	<p>1 知り合うための活動をする。 ・あいこじゃんけん 【安心感】</p> <p>2 緊張をほぐす活動をする。 ・キャッチ ・前後左右 【安心感】</p> <p>3 少人数のグループ活動をする。 ・ビート 【コミュニケーション】</p> 	<p>1 緊張をほぐすための活動をする。 ・まねっこ 【安心感】</p> <p>2 課題解決活動をする。 ・パイプライン 【コミュニケーション】 【役割意識】</p> 	<p>1 緊張をほぐすための活動をする。 ・エルボータッチ ・トゥータッチ ・バランスくずし 【安心感】</p> <p>2 少人数のグループ活動をする。 ・ガッチャン鬼 【コミュニケーション】</p> <p>3 課題解決活動をする。 ・スタンドアップ 【コミュニケーション】 【役割意識】</p> 
振り返り	<p>4 AFPYの活動を振り返る。 【認め合い】</p>	<p>3 AFPYの活動を振り返る。 【認め合い】</p>	<p>4 AFPYの活動を振り返る。 【認め合い】</p>
地域活動	<p>5 種まき・苗作りに取り組む。</p> 	<p>4 地域の農業発展に尽した偉人の業績を知る活動に取り組む。</p> 	<p>5 稲の花の観察に取り組む。</p> 
振り返り	<p>6 地域活動を振り返る。 【認め合い】</p>	<p>5 地域活動を振り返る。 【認め合い】</p>	<p>6 地域活動を振り返る。 【認め合い】</p>

(ウ) 地域交流1の考察

じゃんけん活動やエルボータッチなど、知り合うための活動や緊張をほぐすための活動で、楽しみながら心身のウォームアップを行い、安心できる雰囲気づくりを行った。また、少人数のグループ活動を行い、児童と地域住民がコミュニケーションを図った。しかし、地域住民の参加人数が少なかったため、児童が地域住民と十分なコミュニケーションを図

ることができなかった。

AFPY の振り返り活動の中での児童と地域住民の感想を表 6 に示す。地域住民から認めてもらえたこと、ほめてもらえたことが児童の喜びにつながっていることが分かる。

表 6 児童と地域住民の感想

児童の感想	地域住民の感想
<ul style="list-style-type: none"> ・活動前はとても緊張していたけど、一緒に AFPY をしたら<u>仲良くなれて、種まき活動も楽しく</u>できました。 ・<u>楽しく</u>地域交流を行うことができた。 ・AFPY の活動中、高校生のお兄さんに「すごい」とか「がんばったね」と言ってもらえて<u>うれしかった</u>。 ・パイプラインで、勇気を出して意見を言ったら、みんなが「ナイス！」と<u>ほめてくれてうれしかった</u>。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初は緊張していたけれど、AFPY の活動をして、<u>緊張がほぐれた</u>。 ・緊張していたが、AFPY をしたから、<u>笑顔</u>でスムーズに種まきに移ることができた。その後のグループに分かれての種まき指導に<u>緊張せず</u>にはいれてよかった。 ・まとめないといけないというプレッシャーがあったが、<u>AFPY で緊張がほぐれ</u>、種まき活動の前に 5 年生との<u>距離も少し縮まった</u>ような気がした。

その後は、地域住民が主体となった地域活動の米作りを行った。AFPY の活動で児童と地域住民が関わりをもつことができたため、緊張せずに地域活動に参加することができた様子がうかがえる。

地域活動後の振り返り活動では、「高校生と仲良くなることができたので、今度、高校のイベントに行ってみようと思う」という児童の感想が聞かれた。AFPY の手法を用いた地域交流を通して、地域住民と交流する楽しさを感じていることがうかがえる。そして、これから地域で行われる他の地域行事にも参加し、地域住民と交流していきたいという意欲につながっていることが分かる。原籍校教員の聞き取りから「5 年生と高校生の協力型の課題解決活動がとてもよかった。このような活動をたくさん仕掛けていくことが大事だと感じた」という感想を聞くことができた。また、高等学校の教員から「高校生にとっても、自分たちの地域活動以外に児童と関わる AFPY の時間は有意義であった」という感想を聞くことができた。このことから、AFPY の活動は、5 年生児童と高校生の関わりを促進する効果があったと考えられる。

ウ 地域交流 2 「上郷ハッスル誠塾」


(7) 地域交流 2 の概要

今年度初めて山口市立上郷小学校の学校運営協議会は、PTA と連携して、地域住民主体の学習会を開催した。この学習会は、上郷小学校児童を地域全体で育てていくことを目的としているため、地域住民を対象に学習会のボランティアを募り、行われた。この学習会を通して、児童と地域住民の関わりを促進するため、学習会の前に AFPY の活動を取り入れることにした。

(イ) 地域交流 2 の実際

地域交流 2 の活動内容と用いた AFPY の手法を表 7 に示す。なお、【 】内に、用いた AFPY の手法、そして「・」に AFPY の活動名を示すこととする。

表7 地域交流2の活動内容

	1回目	2回目	3回目	
A F P Y の 活 動	<p>1 知り合うための活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ファイブファイブ ・テンテン ・Cゾーンチェック <p>【安心感】 【コミュニケーション】</p> 	<p>1 知り合うための活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・握手 <p>【安心感】</p> <p>2 少人数のグループ活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・せーの！ ・見えない共通点 <p>【コミュニケーション】</p> 	<p>1 緊張をほぐすための活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・じゃんけん ・星人鬼ごっこ <p>【安心感】 【役割意識】</p> <p>2 少人数のグループ活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プラとんぼ <p>【コミュニケーション】</p> <p>3 課題解決活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヤートロープ <p>【役割意識】</p> 	
	振り返り	<p>2 緊張をほぐすための活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かっぱおに <p>【コミュニケーション】</p> <p>3 課題解決活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パイプライン <p>【コミュニケーション】 【役割意識】</p>	<p>3 課題解決活動をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラインナップ ・風船列車 <p>【コミュニケーション】 【役割意識】</p>	
	地域活動	<p>4 AFPYの活動を振り返る。</p> <p>【認め合い】</p>	<p>4 AFPYの活動を振り返る。</p> <p>【認め合い】</p>	<p>4 AFPYの活動を振り返る。</p> <p>【認め合い】</p>
	振り返り	<p>5 学習会に取り組む。</p> 	<p>5 学習会に取り組む。</p> 	<p>5 学習会に取り組む。</p> 
振り返り	<p>6 地域活動を振り返る。</p> <p>【認め合い】</p>	<p>6 地域活動を振り返る。</p> <p>【認め合い】</p>	<p>6 地域活動を振り返る。</p> <p>【認め合い】</p>	

(ウ) 地域交流2の考察

じゃんけん活動やハイタッチ活動など、知り合うための活動や緊張をほぐす活動を通して、児童と地域住民が親しい関係を築くことができるように支援した。少人数のグループ活動では、他者の話に耳を傾けることや、他者を意識して取り組む活動を選択することで、児童と地域住民がコミュニケーションを図る場を設定した。また、課題解決活動では、課題を解決するために、児童と地域住民が試行錯誤を繰り返すことを通して、関わり

を促した。

AFPY の振り返り活動では、自分の意見を伝えることができたことや意見を認めてもらえたことに喜ぶ児童の感想が多く聞かれた。また、地域住民からは課題を解決するために、子どもたちと協力し、達成感を感じたという感想が聞かれた。

その後は、地域住民が主体となった地域活動の学習会を行った。自分から地域住民に質問する児童の姿や積極的に会話をする児童の姿から、AFPY の活動で関係づくりを進めることができたと考える。

地域活動後の振り返り活動の感想や振り返りシートの記述から、AFPY の手法を用いた地域交流に関する児童と地域住民の感想をまとめたものが表 8 である。児童と地域住民が AFPY の活動を共有体験することで、楽しく地域交流の時間を過ごすきっかけとなったことがうかがえる。また、自分自身と地域との関わりを見つめ直し、さらに地域交流で関わりをもちたいという意欲につながりつつあることが分かる。

表 8 児童と地域住民の感想

児童の感想	地域住民の感想
<ul style="list-style-type: none"> ・わたしは、地域の人と活動をあまりしていなかったけれど、<u>地域の人といっぱい活動ができたので楽しかった。</u> ・違う学年の人や地域の人に自分から声をかけたことがあまりなかったけど、この交流でいろいろな人に<u>自分から話せるようになったのでよかった。</u> ・AFPY をして、わたしは<u>地域の人に支えられているのだ</u>と思った。そして、<u>わたしも地域の重要な一員なのだ</u>と思った。 ・これからも地域の人と関わって、地区などの行事には進んで参加して、<u>地域の人と仲良くしていきたい。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・AFPY をしていると子どもたちの表情が段々と変わっていき、<u>明るく元気になっていくのが見られて良かった。</u> ・子どもたちにたくさん「ありがとう」と言ってもらえてうれしかった。 ・子どもたちとの交流の大切さを改めて感じた。 ・AFPY の活動を通して子どもや地域の人と関わり、今まで以上に<u>信頼感や親しみが大きくなった。</u> ・<u>AFPY を通して子どもと地域がつながり、学校と地域がつながっていくのだ</u>と思った。私は、これからもこの<u>地域の人、子どもたちとたくさん交流できたらいいな</u>と思う。

(3) 研究の結果と考察

ア 地域交流 1 及び地域交流 2 の結果と考察

児童と地域住民の自己有用感の変容を調べるため、4 件法の質問紙を用いて調査を実施した(表 2)。本研究の調査分析には、t 検定を用いた。t 検定とは、2 つのグループの平均の差が偶然誤差の範囲内にあるかどうかについて調べるものである。2 つのグループの平均の差に有意差が確認されたものには、記号 (**、*) でグラフに示すこととした(表 9)。

表 9 有意差の表記

表記	t 値	解釈	補足
**	$p < 0.05$	有意な差 (有意水準 5%)	2 つのグループの平均の差が偶然である確率が 5% 以下である。
*	$p < 0.1$	有意傾向にある差	2 つのグループの平均の差が偶然である確率が 10% 以下である。

(7) 自己有用感について

児童と地域住民共に、事前調査の自己有用感の値が最も低く、3回目実施後の自己有用感が最も高くなっている。このことから、児童と地域住民相互に自己有用感の醸成を確認することができる。

特に、地域交流2の児童の事前調査と3回目実施後では、t検定による有意傾向にある差を確認することができた。(図4)。

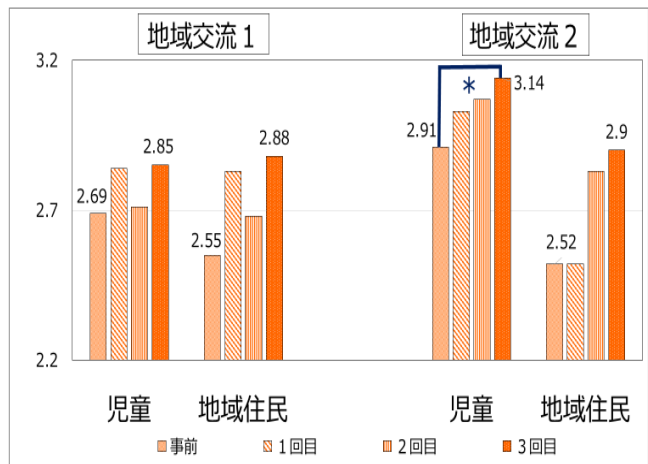


図4 自己有用感の変容

(イ) 三要素の変容について

a 「存在感」について

事前調査と3回目を比較すると、地域交流1では、地域住民に有意傾向にある差を確認することができる(図5)。また、地域交流2では、児童に有意傾向にある差が見られ、地域住民には有意な差が見られた。これは、AFPYの手法を用いることで、児童と地域住民が安心できる雰囲気の中で、互いに自己の存在感と相互の信頼感を認め合うことができたからと推察される。

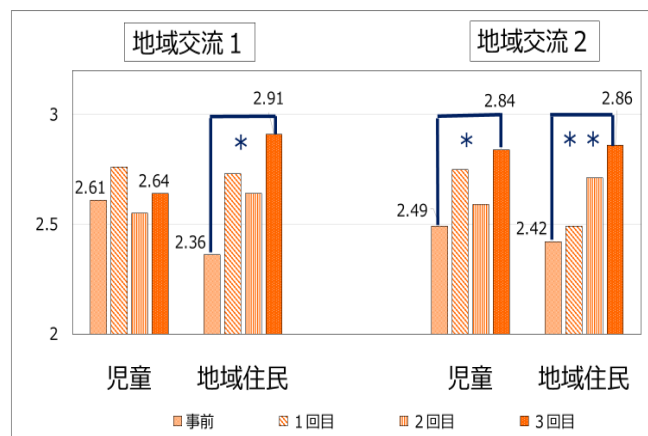


図5 存在感の変容

2年連続で米作りの交流に参加している高校3年生の感想として、「すぐに米作りの活動をするよりも、今回はAFPYで仲良くなってからの米作りだったので、互いの距離を近く感じ、関わりをもちやすかった」という記述が見られた。また、「参加することで、少しでも役に立ててよかった」、「地域の一員という自覚がもてた」という地域交流に肯定的な地域住民の記述も見られた。

b 「貢献」について

事前調査と3回目を比較すると、地域交流2の地域住民に有意な差を確認することができた(図6)。

その要因として、地域交流1と比べ、地域住民の参加が24人と多く、児童だけでなく、地域住民同士が関わり合うことで、地域に対する親しみや地域の一員として役に立つという共通の一体感をよリモてるようになったからと考える。

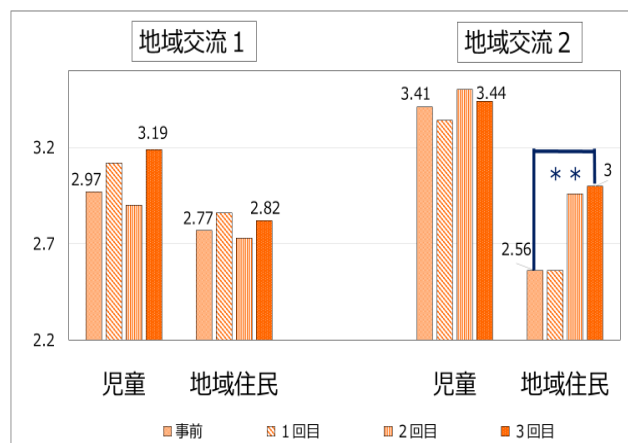


図6 貢献の変容

c 「承認」について

児童と地域住民共に高まりはみられたが、有意な差を確認することはできなかった（図7）。

その要因として、AFPYの活動の中で、他者に自分の行動が認められているという実感に充分につながっていないからと考えられる。そのため、地域交流における振り返り活動の中で、互いの行動を認め合い、一人ひとりのよさを伝え合うことで自分が承認されているという実感につなげていく必要がある。

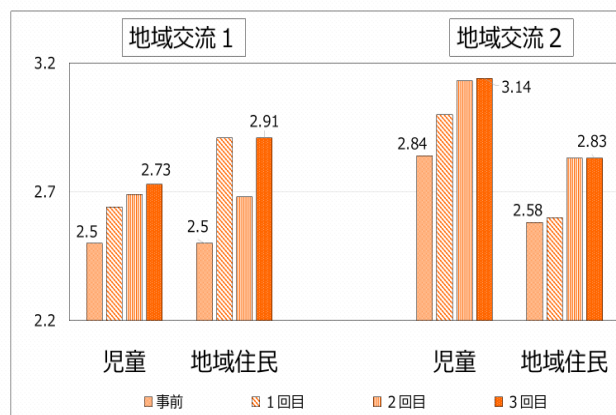


図7 承認の変容

3 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究では、児童と地域住民相互の自己有用感を醸成するために、地域交流にAFPYの手法を用い、学校と地域で実践し、検証した。自己有用感の変容についての調査から、AFPYの手法を用いた地域交流を行うことで、児童と地域住民相互の自己有用感を醸成することにつながることが分かった。また、自己有用感を醸成する主な三つの要素を因子分析した結果、最も「存在感」に得点上昇がみられた。よって、AFPYの手法を用いた地域交流では、「存在感」が自己有用感を高める大きな要因となっていることが分かった。

このように、本研究の結果は、「AFPYの手法を用いた地域交流を行うことで、自分の存在を価値あるものとして受け止めるようになり、児童と地域住民相互の自己有用感を醸成する効果がある」という仮説を支持するものであったといえる。

(2) 今後の課題

今後は、児童と地域住民相互のさらなる自己有用感の醸成をめざすために、次の三つに取り組んでいきたい。

まず、地域交流に関わる教職員、地域リーダー等の人的資源の確保である。教職員、地域リーダー等を対象に継続的なAFPYの研修を実施し、必要なスキルを高め、地域交流の支援にあたる指導者の育成や質の向上に努めたいと考える。

次に、組織的な地域交流の実践である。既存の学校運営協議会や自治会等との連携を密に図ることや、また、地域コーディネーターを活用し、学校と地域の協働体制を整えることで、より多くの地域住民や保護者の参加を促進していきたい。

さらに、計画的な地域交流の実施である。子どもたちの姿や地域の現状、教育資源等に関する情報を学校と地域で共有し、各学年の児童の実態に応じた地域交流を計画したい。また、今回実施ができなかった中学校との交流も視野に入れる。そして、「地域とともにある学校」づくりを推進していくことに尽力したい。

今後は、以上の3点を踏まえて、学校と地域が連携を図りながら、より一層AFPYの手法を用いた地域交流の取組を推進し、児童と地域住民相互の自己有用感の醸成に取り組んでいきたい。

今年度、このような貴重な研修の機会を与えていただいた山口県教育委員会、協力をいただいた各団体、山口県十種ヶ峰青少年自然の家の職員をはじめ、ご指導いただいた全ての方々に心より感謝いたします。

【注】

注¹ 山口県教育庁社会教育・文化財課が認定し、県内の各種研修会等の講師として AFPY の活動を行う者

【引用文献】

- *¹ 栃木県総合教育センター、『高めよう！自己有用感』、2013、p 6、9
- *² 藤村寿、『AFPY 入門 「やまぐちふれあいプログラム」の理論と実践』、宮崎製版、2005、p 65
- *³ 山口県庁ホームページ、「AFPY の推進・トップ」
<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms.a50400/afpy/afpy.html>

【参考文献】

- ・北島貞一、『自己有用感—生きる力の中核—』、田研出版、1999
- ・滝充、『「異学年交流」「地域交流」こそ育成の要諦—徹したい教師の「学習支援」、国立教育政策研究所生徒指導進路指導研究センター、2006
- ・滝充、『「自己有用感」獲得によるいじめの未然防止—『日本のピア・サポート・プログラム』に基づく人間関係づくり—』国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター、2008
- ・山口県教育委員会、『5つの視点で授業をつくる—AFPY で変わる子どもと授業—』、明治図書出版、2014
- ・プロジェクトアドベンチャージャパン、『グループのちからを生かす 成長を支えるグループづくり』、みくに出版、2005
- ・甲斐崎博史、『学級ゲーム&アクティビティー100』、ナツメ社、2013
- ・諸澄敏之、『みんなの PA 系ゲーム 243』、杏林書院、2005
- ・藤村寿、『AFPY 入門 「やまぐちふれあいプログラム」の理論と実践』、宮崎製版、2005
- ・津村俊充・石田裕久、『ファシリテーター・トレーニング』、ナカニシヤ、2005
- ・『平成 28 年度 地域とともにある学校づくり推進フォーラム』、山口県教育委員会、2016
- ・藤井恵美子、『平成 26 年度自然体験活動等長期研修報告書』、2014
- ・上野剛、『平成 27 年度自然体験活動等長期研修報告書』、2015

【参照ホームページ】

- ・文部科学省、「地域間交流体験活動の成果」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/kekka/04121301/003.htm
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター「子どもの社会性が育つ『異年齢の交流活動』」、2011
www.nier.go.jp/shido/centerhp/.../2306sien3_2s.pdf
- ・山口県教育委員会、「山口県教育推進の手引き」、2015
<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50100/dctptebiki/h23dctpguide.html>
- ・山口県教育委員会、「山口県教育振興基本計画」、2015
<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50100/kihonkeikaku/kihonnkeikaku.html>
- ・Project Adventure Japan
<http://www.pajapan.com/>

参考資料1 「主な AFPY の活動名称及び活動の手順」

AFPY の活動名称	活動の手順
前後左右	①全員で輪になり、手をつなぐ。 ②「前」「後」「左」「右」の指示に従って、軽くジャンプをする。
ビート	①2人組で向かい合う。 ②拍手1回ハイタッチ、拍手2回ハイタッチ2回、拍手3回ハイタッチ3回と数を増やしていく。 ③拍手3回までいったら、2回、1回と減らしていき、全員でリズムを合わせる。
パイプライン	①パイプを半分にした半筒状のものを1人1本持つ。全員でパイプを接続し、ビー玉を転がしていく。 ②順序を入れ替わりながら、ビー玉を目的地まで運ぶ。
トゥータッチ	①2人組になって向かい合い、両手をつなぐ。 ②自分の足のつま先を踏まれないようにしながら、相手のつま先を、足で軽く触れる程度に踏む。
ガッチャン鬼	①2人組をつくる。また、その中から鬼役のペアを決めて、鬼と逃げる人を決める。 ②2人組は腕を組んだ状態で鬼ごっこをする。 ③逃げる人は、「ガッチャン」と言いながら、他の2人組にくっつく。 ④逃げる人に腕を組まれた反対側の人は、組んでいた腕を外して逃げる。
スタンドアップ	①2人組で向き合い両手をつなぎ、足の先をつけたまま同時に立ち上がる。 ②4人組、8人組と人数を増やして取り組む。
Cゾーンチェック	①2本のロープで、二重の円をつくる。なお、中心に近い円を「安心ゾーン」、その外側を「チャレンジゾーン」、ロープの外を「パニックゾーン」とする。 ②提示された状況や場面に合わせ、自分がどのゾーンに当てはまるか考え、ゾーン間を移動する。
せーの！	①「せーの」のかけ声のたびに「パン」と手をたたき、拍手の数を増やしていく。 ②何度か繰り返し、「GO」のかけ声があれば、直前の拍手の数の仲間を集める。
見えない共通点	①「せーの！」を行い、少人数のグループをつくる。 ②それぞれのグループごとに、一見して分からない共通点を見つける。
風船列車	①1人が一つの風船を持つ。 ②自分のお腹と前の人の背中の中に風船をはさみ、1列に並ぶ。 ③風船には手で触れず、前進する。途中で風船が落ちたら、先頭を交代する。
星人鬼ごっこ	①頭を押さえた頭星人、お腹を押さえたお腹星人、お尻を押さえたお尻星人等のグループに分かれる。 ②その姿勢のまま鬼ごっこを行い、タッチされたら、その星人に変身する。 ③最終的に最も人数の多い星人グループが勝ちとなる。
プラとんぼ	①2人組でプラスチック製のとんぼを飛ばし合う。 ②慣れてきたら、4人組、8人組と人数を増やし、全員にパスが回るようにするなどの課題解決に取り組む。
ヤートロープ	①一円のロープを全員で握る。互いに体を預け合う。 ②互いに体を預け合い、立位から後ろに傾ける。

地域子どもたちと知り合うきっかけがほしい！
子どもたちが喜ぶ地域行事を開催したい！



地域交流にAFPYを取り入れてみませんか？



AFPY (Adventure Friendship Program in Yamaguchi の略称) とは…

他者とかかわり合う活動を通して、個人の成長を図り、豊かな人間関係を築くための考え方と行動の在り方を学び合う、山口県独自の体験学習法です。グループ・チャレンジによる活動を通して、お互いに交流することや仲間づくりをねらいとします。「人の役に立った」「人から感謝された」「人から認めてもらえた」などと感じることで、個人やグループの人間関係のよりよい変容をめざします。

【詳しく知りたい方】

山口県社会教育・文化財課 Web → 「AFPY の推進」

地域にどんな子がいるのかな？

どう声をかけたらいいの？

地域の子と仲が良くなった！

子どもから元気をもらったわ！

AFPY による地域交流



AFPY による取組の様子

6月2日、上郷小学校5年生と近隣高等学校の生徒との交流会で AFPY に取り組みました。最初は、緊張していた子どもたちが、AFPY に取り組む中で笑顔になり、積極的に交流する姿が見られました。

【高等学校3年生の感想】

ちょっとした時間の AFPY で緊張がほぐれた。5年生との距離も少し縮まった気がした。

- ◎対象は、地域の人と上郷小学校児童（全学年）です。
- ◎費用は一切かかりません。
- ◎人数・時間など、お気軽にお問い合わせください。

【連絡先】山口県十種ヶ峰青少年自然の家 長期研修生 末廣 俊夫
〒759-1602 山口県山口市阿東嘉年下 1883-2
TEL 083-958-0033